

日帰り人間ドックを受けてすでに二十数年になる。きっかけは勤務していた職場で禁煙を実施することになったからだ。すでに年令は五十代前半。二十代からタバコを吸い始め、その頃は日に五、六箱（一箱二十本入）も吸うようになっていた。職場の同僚や家族に長年迷惑をかけていたことになる。また、体調も決して良い方ではなかった。

禁煙外来を受診し、禁煙に取り組むこと約半年。やつとの事で禁煙に成功した。そして、その年から人間ドックを受けることにした。最初の人間ドックの結果通知の内容は惨憺たるものだった。しかし、経過観察ということもあり、あまり気にも留めなかった。ただ、肺がんに関する項目はしっかりと視ていた。いつ『肺がんの怖れあり』と通告されるかと、ビク／＼していたのが正直なところ。外に向つては「俺はがんになるとしたら肺がんだ！」などと、不安を隠して強がりも言っていた。

しかし、その時はやってきました。二〇一九年十月下旬に恒例の日帰り人間ドックを受け、十一月下旬に結果が届いた。『呼吸器検査で異常を認めるので三ヶ月後検査をお受けください』。ヘビースモーカーだったのでいつかは指摘されると覚悟はしていたが、いざ通告されてみるとかなり不安な自分を認める。三ヶ月後とはあったが、翌年一月九日に高血圧症の治療を受けていた循環器科の主治医に診察後人間ドックの結果を相談した。主治医はすぐにCT検査を予約してくれ、その結果を確認して同じ病院の呼吸器科に連絡し、専門医の診察が受けられるよう手配してくれた。

呼吸器科での精密検査の結果、左肺の初期の肺がんと診断される。すぐに手術して切除した方がよいとのこと、当病院では肺がんの手術はしていないので、肺がんの手術ができる近隣の病院を紹介される。不安な日々が続いた。悪い事は続くもので、息子が車で人身事故を起こし被害者の方は重症、さらに親しい友の突然の病死という血の気を失う事態が重なった。必死に平常心を保ちながら紹介病院での診察日を待った。

紹介された病院での手術へ向けての精密検査が始まった。その結果は、肺腺がん。大きさは約一センチ位。リンパ節二カ所に転移なし。脳と骨にも転移なし。手術の方法は全身麻酔による胸腔鏡補助下舌区域切除と

告げられた。術中迅速組織診断で悪性であれば大幅な切除になるとも。入院期間は約十日間とのことだった。

白内障の手術や右耳朶の血腫切除で一、二日間の入院は体験していたが、全身麻酔による手術で約十日間の入院は初体験。私の周りには何度も大手術をして生還した人などがあるので、それに比べたら余りにも軽い手術で深刻な顔をして言えることでもない。しかし、腹を括れない不安な気持は否定できなかった。

二〇二〇年五月十九日午前十時に手術室へ。朦朧とした意識で麻酔から覚めたのは午後五時半だった。手術は成功して、やはり悪性で切除区域が広がったので思ったより時間がかかったとのこと。詳細は息子に説明したので後で聞くようにと言われた。何よりまずホッとした。この安堵感はいままで味わったことのないものだった。術後は順調で五日後には退院となった。退院後の検査も異常なしで、抗がん剤治療の必要もなく、半年毎に精密検査をし五年間異常を認めなければ「卒業」ですと主治医から告げられた。

主治医の話は続いた。レントゲンではがんを確認できず、腫瘍マーカーの数値も正常値で、造影CTと造影MRIで確認できたがんを、人間ドックを受けた病院でよく見つけてくれたね、と。二十数年間も通院していて、しかも日帰り人間ドックも受け続けていた「かかりつけ病院」の医師達や医療スタッフに心から感謝した。そして何よりレントゲンを読影して三ヶ月後の精密検査を指示してくれた放射線科医師には特に感謝したい。呼吸器の異常を一年後、二年後に指摘されていたら果してどんな結果になっていただろうかと思うと、人間ドックを受け続けていて本当に良かったとつくづく思った。術後三年経って、半年毎の精密検査でも今のところ異常なし。何よりも農作業や軽登山ができ、全く以前と変らぬ生活を送れることに喜んでいる。

早期発見、早期治療は年一回の人間ドックを受けることでしか達成されないかと確信しました。このことを声を大にして多くの方々に伝えたい。